

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

Reed

No. 86

October, 2026

関西大学ニュースレター

発行日：2026年(令和8年)10月20日
発行：関西大学 総合企画室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
www.kansai-u.ac.jp

Lazy lie Crazy

YouTubeで追い続ける夢
5人でつくり上げた、唯一無一のチーム
■特集
Lazy Lie Crazy (レイクレ)
・YOUTUBER



■特集 — 1

■世界文化遺産「飛鳥・藤原の宮都」特集 — 7

■リーダーズ・ナウ — 9

卒業生 — 前宮内庁書陵部陵墓課 陵墓調査官・関西大学客員教授
徳田 誠志 さん

宮内庁書陵部陵墓課 陵墓調査室 田中 詢弥 さん

在学生 — 人間健康学部 4年次生 米沢 友翔 さん

社会学部 3年次生 萬野 七樹 さん

■研究最前線 / Research Front Line — 17

ジェンダーに関する学生意識調査

約40年の継続調査から捉える関大生のジェンダー意識
人権問題研究室 ジェンダー研究班

— 酒井 千絵 教授(社会学部) / 多賀 太 教授(文学部)

• Exploring Kansai University Students' Gender Attitudes
through Nearly 40 Years of Continuous Surveys
Gender Studies Research Group, Institute of Human Rights Studies
— Professor Chie Sakai (Faculty of Sociology)
Professor Futoshi Taga (Faculty of Letters)

■トピックス [学内情報] — 21

大阪・関西万博のレガシーを未来へ——

学生会館「誠之館群」の建替計画を推進 ほか

■関大ニュース — 23

ビジネスデータサイエンス学部と

クロス・マーケティンググループが連携協定を締結 ほか

YouTubeで追い続ける夢

●5人でつくり上げた、唯一無二のチーム

レイジー ライ クレイジー
Lazy Lie Crazy (レイクレ)

●YouTuber

asa YouTube

登録者数280万人超のYouTubeグループ「Lazy Lie Crazy(レイクレ)」。関西大学卒業生のどば師匠さん、たかしさん、てっちゃんさん、ぺろ愛男爵さんと、近畿大学出身のともやんさんによる5人組は、若い世代を中心に絶大な支持を集めている。大学生活で出会った仲間と手探りで始めた動画制作だが、その道のりは順風満帆なものではなかった。再生回数が伸びない時期、コロナ禍での苦悩、チャンネルの方向性をめぐる葛藤――。

関西大学を拠点として動画制作に夢中になったメンバーたちに、大学時代の思い出から現在につながる活動の軌跡、彼らが考える「成功」について話を聞いた。



◆コンセプトは「男があこがれるチャンネル」

——どのようなグループなのか、改めて教えてください。

●どば師匠 大阪・守口を拠点に活動している5人組のYouTubeグループです。「何系YouTuber?」と聞かれるのが実は一番難しい質問で、僕らは一つの分野に特化せず、無人島に行ったり、漁師生活をしてみたり、いろいろなエンタメ企画動画を投稿しています。

●たかし 動画はメインチャンネルだけで週5本、サブチャンネルや個人チャンネルも含めると、ほぼ毎日投稿・更新していますね。YouTubeだけでなく、個人としても音楽や俳優、アパレルの分野に挑戦するなど、活動の幅を広げています。

●ともやん 結成当初からずっと掲げているコンセプトは、「男があこがれるチャンネル」です。もちろん自分たちが楽しむことも大事なんですが、「こういう仲間がいたら最高だな」とか、「こういう生き方もいいな」と思ってもらえる存在でありたい。その考え方はずっと変わっていません。

●ぺろ愛男爵 今では撮影や編集作業を支えてくれる仲間も増えましたが、それでも毎週の企画会議は必ず5人全員で行い、レイクレらしさを大切に動画制作に取り組んでいます。

◆はじまりは「とにかく有名になりたい」

——レイクレ結成のきっかけを教えてください。

●どば師匠 実は関大に入学して2日目で足を骨折したんです(笑)。



ともやん
●1997年大阪府生まれ。近畿大学附属高等学校卒業。2020年近畿大学経営学部卒業

ともやん

ぺろ愛男爵

てっちゃん

●1998年大阪府生まれ。関西大学北陽中学校・北陽高等学校卒業。2020年関西大学政策創造学部政策学科卒業

●1997年大阪府生まれ。関西大学北陽中学校・北陽高等学校卒業。2020年関西大学システム理工学部機械工学科卒業

たかし
●1997年大阪府生まれ。関西大学北陽高等学校卒業。2020年関西大学文学部総合人文学科卒業

たかし

どば師匠

●1997年大阪府生まれ。関西大学北陽高等学校卒業。2020年関西大学文学部総合人文学科卒業

■特集

新入生の時期って、新歓とかで一番楽しい時期じゃないですか。でも僕は、その横を車椅子で移動していました。知り合いからも「入学早々何してんねん」って笑われて。それが悔しくて「もっと目立ちたい」と思い立って、サークルを10個掛け持ちしてみたり、「ミスターキャンパス関大」に応募してみたり。結果は予選落ちでしたが(笑)。その頃から「有名になりたい」という思いが強くなって、関大北陽時代からの友達だった、たかし、てっちゃん、ぺろ愛男爵と、Twitterに動画を投稿し始めました。

●**ともやん** 僕は近畿大学の学生でした。高校まではバスケットボール一筋で、大学に入ってからYouTuberという存在を知って、バスケ以外にも有名になれる道があるんだと思っていた時に、彼らの動画を見つけたんです。運転免許合宿での何気ない動画だったんですが、「この人たちが面白いな。一回連絡してみよう」と、全く面識はなかったんですがDMを送ってみました。今振り返ると、本当にあのDMがきっかけでしたね。

●**てっちゃん** 本格的に活動を始めたのは大学2年次の頃で、血液型も動物占いもバラバラの5人が、ここまで仲良くなって何年も一緒に活動している。振り返ると、本当に不思議ですね。

●**ぺろ愛男爵** 占い師さんに見てもらおう企画で、「奇跡みたいなバランス」と言われたこともあります。確かに誰か一人でも違う選択をしていたら、今のレイクレはなかったと思います。

——4人は関大北陽出身ですが、受験先に選んだ理由を教えてください。

●**どば師匠** 中学生の時、親と関西大学のオープンキャンパスに行ったんですよ。自然も施設も綺麗で人も多くて、とんでもない場所だと衝撃を受けて、「この大学に行けたらいいな」と思いました。その横で母には「ママの息子、関西大学って言わせて!」とささやかれていました(笑)。

関大北陽時代



▲たかし



▲ぺろ愛男爵



▲どば師匠



▲てっちゃん



▲関西大学卒業式(どば師匠)



▲関西大学卒業式(ぺろ愛男爵)



▲Lazy Lie CrazyのYouTube「1ヶ月で5人・3万円生活」のトップ画面

Lazy Lie Crazy——レイジー ライ クレイジー

■大阪府守口市を拠点に活動する5人組YouTuberグループ。略称「レイクレ」。2017年8月6日結成。「男があこがれるチャンネル」をコンセプトに、仲間との絆と遊び心あふれる動画で、中高生を中心に人気を誇る。登録者数280万人超(2026年9月現在)

●**ぺろ愛男爵** 姉が私立に通っていたこともあり、我が家では公立に行く選択肢がなくて、私立に行くものだ親に洗脳されていました(笑)。

●**たかし** 僕は兄が関大には合格できなかったのが、敵をとろうと、復讐ですね(笑)。併設校から関西大学に進学したいと思って、高校から関大北陽に入りました。

●**てっちゃん** 当時は小学生だったので正直深い理由はなくて、「関西大学を名乗れることは強い」と親の勧めで、塾に通って中学受験をしました。今振り返ると、本当に良い選択をしたと思います。

◆大学生活の中心にあったYouTube

——大学2年次にチャンネルを開設しますが、どのような大学生を送っていたのでしょうか？

●**どば師匠** 正直、YouTube活動一色でした(笑)。僕は文学部の英米文学英語学専修で、鍋島弘治朗先生のゼミでした。実は真面目な一面もあって、卒業論文のテーマは日米YouTuberの比較。日本とアメリカの動画サムネイルを100枚以上集めて比較して、見えてくる傾向をまとめました。

●**たかし** どば師匠と同じ文学部だったのですが、僕はほぼ10割



YouTube企画会議の様子

YouTubeでした(笑)。人の心理に興味があったので、心理学専修の田中俊也先生のゼミに入りました。卒業論文では、SNSにおける人の心理・心情、幼少期の愛着形成と承認欲求との関係性について、アンケートを取って書きましたね。今につながるような内容で面白かったです。

●**てっちゃん** 僕は政策創造学部出身ですが、単位が足りなくてゼミに入れなかった珍しいタイプでした(笑)。真面目に受けていた授業のミニッツペーパーを一番に提出したら、「こんなに早く書ける内容ではない」と先生に怒られたりして。要領は良い方だったのですが、学業は歯車が噛み合いませんでした。時間を見つけてはYouTubeの企画を練ったり、サムネイルを作ったり、気づけば友達よりメンバーと過ごす時間の方が多くなっていました。

●**ぺろ愛男爵** 僕は理系だったので、特に単位取得が大変でした。伊藤健先生のナノ機能物理工学研究室で、セミの翅の構造を研究していました。セミの翅には抗菌・殺菌などの機能があるんですよ。例えばドアノブとか、その構造を製品に生かすという研究です。スイミングコーチのアルバイトも4年間続けたので、勉強、バイト、YouTubeと忙しい毎日でした。

●**ともやん** 全員YouTube中心の生活でしたね。近大生だった僕

も、撮影場所がほとんど関大前だったので、関大にいる時間の方が長かったくらいです(笑)。

◆追い求めたのは「5人だからこそ面白さ」

——当初から、活動は順調だったのでしょうか？

●**たかし** 初めて投稿した動画から「これは100万再生いくわ!」と言っていました(笑)。実際は、再生回数も登録者数も全く増えず……。ただ、根拠は何もないんですが、自分たちが一番面白いという自信だけはありました。最初の転機になったのは、ともやんのバスケットボール企画です。

●**ともやん** 当時、全国大会出場選手でバスケ動画を投稿しているYouTuberはほとんどいなかったんです。絶対に伸びると思っていました。実際に公開すると、1時間で10万近く再生され、画面を更新するたびに数字が伸びて、コメントが増えていくのが本当にうれしかったです。

●**ぺろ愛男爵** ただ、その成功が新たな悩みにもなりました。僕たちはエンタメをしたかったのに、バスケ動画だけが伸びるようになって、だんだんと「ともやんと愉快な仲間たち」みたいになってしまいました(笑)。試行錯誤した結果、バスケ動画を個人チャ

■特集

lazy lie Crazy



ンネルに移す決断をしました。そこから数字だけではなく、「5人だからこそ生まれる面白さ」を追求するようになりましたね。

◆ピンチをチャンスに変えるアイデア

——大学卒業前後にコロナ禍が到来しましたが、どのような影響がありましたか？

●**どば師匠** 外で撮影するだけで批判される時代で、YouTube活動そのものが難しかったです。話し合いを重ねた結果、当時5人で共同生活をしていたので、その環境を生かして、「5人で1カ月3万円生活」や「漁師生活」といった長期企画を始めました。ただ節約するだけではなく、ゲームに勝った人が一番お金を使えるというようなオリジナルルールも考えました。

●**たかし** レイクレは、コロナ禍という逆境をチャンスに変えたグループと言っても、過言ではないと思います。当時は1本完結の動画が主流だったので、1カ月単位での連載企画をするYouTuberは少なかったんです。共同生活の動画は、個々のキャラクターを知ってもらうきっかけになりましたし、部屋の中だけでも面白く

できると続けた結果、風向きが変わりだして「레이크レってちょっと面白いね」と言っていたできるようになりました。

●**ともやん** もう一つ大きかったのが「切り抜き動画」です。当時はまだ一般的ではなく、레이크レが先駆的だったと思います。第三者がお勧めした動画は、視聴者に信頼されやすいと考え、ファンの方に切り抜き動画を作ってもらシステムを戦略的につくりました。その結果、1日100人ほどだった新規登録者数が1,000人単位になって、30万人で足踏みしていた総登録者数も60、70万人に。2021年11月には100万人を達成することができました。

◆YouTubeに向き合う覚悟

——コロナ禍前後は、進路選択の時期でもあったと思います。

●**たかし** 停滞期を抜け出す前は、ちょうど就職活動の時期で、「就職をしない」という道を選択しましたが、「本当に生きていけるのか？」と将来への不安やプレッシャーを感じていた時期でもありました。毎日動画を投稿する大変さも合わさって、メンバーの雰囲気も絶妙な空気感でしたね(笑)。

●**どば師匠** 当時は遅刻や計画性の無さなど、学生気分から抜け切れていないところがあったんです。なので5人で「生まれ変わろう」「YouTubeにもう一度向き合おう」と、今でも続けている毎週の企画会議を始めました。企画の良し悪しを徹底的に議論して、何度も方向性を話し合っています。本音で話し合うので、衝突し合ったことも多々(笑)。でも、その日のうちに仲直りするようにしています。会議には必ず3つずつ企画案を持ち寄るので、ネタ帳のスプレッドシートには何千というストックが残っています。

●**てっちゃん** YouTuberとしては珍しいと思いますが、레이크レには出勤・退勤があるんですよ。撮影日は別ですが、編集などのデスクワークの日は、サラリーマンみたいな規則正しい生活をしています。

●**ともやん** チャンネルのブランディングもしっかり管理しているグループですね。僕らのコンセプトである「男があこがれるチャンネル」という軸がブレないように、例えば、視聴者層の割合など、細かい指標まで話し合います。7:3という男女の黄金比を保つことができているか、実は裏では微調整しながら運営を続けているんです。

◆레이크レにとっての「成功」とは

——皆さんにとって、成功とは何でしょうか？

●**ぺろ愛男爵** 自分が満足できる到達点に達した時こそが成功だと思いますが、その地点がどこにあるのかはまだ分からないんです。だから成功へ向かって、今もまだ走り続けている途中です。

●**てっちゃん** HIKAKINさんやはじめしゃちょーさん、東海オンエアさんなど、目標となる方々がまだまだいます。今に満足しているわけではなく、もっと上へという気持ちを5人全員が持っているといます。

●**ともやん** 今思う成功は、幸せであること。どれだけ有名になっても、毎日が苦しくて無理して働いていたら、それは成功とは言えません。ワークライフバランスを大切にしながら、幸せだと思えることが一番の成功ですね。

●**たかし** 僕はすぐ満足してしまうタイプで(笑)。でもゲームのダンジョンみたいに、目標を達成したら、また次の目標が現れるんです。ライフポイントが無限にあるのか、結局はずっと挑戦していますね。

●**どば師匠** 僕はこの5人が一番面白いと思っているので、この5人で活動できていること自体が成功です。これは最初から変わっていません。成功を目指しているというより、今も「長い成功の途中」にいる感覚ですね。

——後輩たちにメッセージをお願いします。

●**ぺろ愛男爵** 大学時代は時間がたくさんありますが、振り返ると、もっとできることがあったと思います。満足せずに、思い出もたくさん作ってほしいですね。

●**てっちゃん** 大学時代は、何にでも挑戦できるし、何者にでもなれる期間。自分に向き合って、失敗してもいいのでぜひ挑戦してほしいです。

●**たかし** 僕もただの学生でしたが、自分が分からない領域に飛び込んでみる、そこに居続ける、やり続けることで、人生が面白くなると思います。成功するか失敗するかまで責任は取れませんが(笑)

●**ともやん** その一歩が、いつか人生を大きく変えるきっかけになるかもしれません。少なくとも、僕たち5人にとってはそうでした。

●**どば師匠** 大学で先輩に言われた「すごいと思うのは、やろうとしていないから」という言葉を金言にしています。過去に「関大には、人がいる。」という関大のキャッチコピーがありました。かけがえのない人に出会える場所なので、目標を見つけて挑戦していく道中で、同じ志を持つ人を見つけてほしいですね。

as a YouTuber



世界遺産
登録決定！

「飛鳥・藤原の宮都」と 関西大学が紡いできた物語



▲高松塚古墳発掘調査中の網干善教助教授(当時)と文学部考古学研究室の学生・大学院生(1972年)

❖「関西大学考古学」の原点・黎明期



写真提供: 共同通信社

●末永雅雄 名誉教授

関西大学と明日香村との関係は、考古学研究室初代室長で橿原考古学研究所初代所長でもあった末永雅雄名誉教授の時代にさかのぼる。末永教授は1933年に着手した石舞台古墳の調査をはじめとする飛鳥地域の遺跡発掘調査に携わり、1950年に関西大学講師として着任。1952年に文学部史料学教授に就任すると、発掘調査や出土品の整理・分析などの研究を行う考古学研究室を開設した。



石舞台古墳

写真提供: 共同通信社

高松塚古墳発掘調査

1972年3月1日から開始された高松塚古墳発掘調査。3月21日に石槨内部を確認し、極彩色壁画を発見した▶



2026年7月26日、「飛鳥・藤原の宮都」(奈良県明日香村・橿原市・桜井市)が、古代日本の国家形成の過程を今に伝える遺産群として高く評価され、国内22件目となるユネスコ世界文化遺産に登録された。飛鳥地域を代表する遺跡である石舞台古墳や高松塚古墳の発掘調査には、関西大学文学部考古学研究室の関係者が長年にわたり携わってきた。初代研究室長だった末永雅雄名誉教授の時代から、70年以上にわたって築かれてきた関西大学と明日香村とのつながりと未来への展望を紹介する。



▲網干善教助教授(左)と発掘調査団の応援に訪れた廣瀬裕三学長(当時)



●網干善教 名誉教授

末永教授の後任となった明日香村出身の網干善教名誉教授は、小学生の頃、石舞台古墳発掘現場の見学をきっかけに考古学への興味を持った。そこで末永教授から「中学生になったらおいで」と声をかけられ、旧制中学時代には実際に末永教授を訪ね、弟子となったという。

なかでも末永教授が指導し、網干教授が中心となって行われた1972年の高松塚古墳発掘調査は、日本考古学史における画期的な出来事となった。約1300年前に描かれた極彩色壁画の発見は社会的な注目を集めただけでなく、それまで考古学的手法に依拠していた調査に、考古学・歴史学・美術史・化学・地質学など多分野の研究者が連携する総合的な視点を取り入れる契機となった。この発掘調査は、考古学界における学問体系のあり方を問い直し、方法論の多様化や調査の国際化を促した。保存や修復、継承まで見据えたこの取り組みは、現代考古学の方針性に大きな影響を与えたとされる。その後、末永教授と網干教授両名の指導を受けた米田文孝名誉教授も、1986年に始まったインド・サハート遺跡(祇園精舎)における日印共同学術調査など、長年にわたり国内外の遺跡調査に携わった。



発掘中の高松塚古墳



高松塚古墳

写真提供: 共同通信社

❖地域連携・継承と未来への発展

当時、日本中から注目を浴びていた高松塚古墳の発掘現場では、教授や学生らが連日泥だらけになりながら調査・研究に取り組んでいた。その奮闘を目の当たりにした元関西大学教育後援会会長の植田正路氏の寄付により、1975年、明日香村に「関西大学飛鳥文化研究所・植田記念館」が設立され、現在も研究・教育・社会連携の一大拠点として活用されている。



関西大学飛鳥文化研究所・植田記念館

長期間におよぶ発掘調査は、その地域の活性化につながる一方、日常生活に不便をもたらすなど、地域にさまざまな影響を及ぼす。「だからこそ、得られた成果を専門家だけのものにせず、きちんと還元して広く活用することが大切です」と各地の調査に携わった米田教授は強く訴える。研究成果の共有や継承のため、関西大学では発掘時の現地説明会や調査概要の発表に加え、公開講座や講演会も積極的に開催している。その代表的な取り組みが、関西大学飛鳥文化研究所・植田記念館の設立と同じ1975年に始まった「飛鳥史学文学講座」だ。歴史はもちろん、飛鳥の謎、当時の都市計画、仏像や伝統芸能といった幅広いテーマを取り上げ、これまで延べ約11万人が受講するなど、研究成果を社会へ還元する重要な役割を担っている。2026年度も、明日香村村長の森川裕一氏を



高松塚古墳壁画再現展示室



西壁女子群像

はじめ10人以上の講師陣を迎え、全14回の講座を開催している。

70年以上にわたって遺跡研究を軸にした関係を築いてきた関西大学と明日香村は、2006年には、大学で育んできた教育・研究成果を村の活性化やまちづくりに生かすため、明日香村との地域連携に関する協定を締結した。更に、2020年には学術・文化交流に関する覚書を締結し、古墳・遺跡の発掘調査の促進や、世界遺産登録に向けた連携など、多様な取り組みを展開してきた。2020年に考古学研究室の学生たちが中尾山古墳再発掘調査(奈良県明日香村)に参加するなど、現在も地域と連携しながら発掘調査や共同研究を続けている。

世界文化遺産登録を経て世界的な注目が高まる中、関西大学は今後も明日香村と協力しながら、文化遺産の調査・保存・活用を推進し、その価値を次世代へと継承していく。



▲中尾山古墳再発掘調査に参加する関西大学学生と大学院生(2020年)

関西大学文学部考古学研究室のあゆみ

1952

末永雅雄氏が教授に就任。
文学部に考古学研究室を開設

1972



末永氏の指導のもと
網干氏を中心となって
高松塚古墳の発掘調査

2020

明日香村と学術・文化交流に関する覚書を締結



1967

網干善教氏が
専任講師として着任

2006

明日香村と地域連携に
関する協定を締結

2026

「飛鳥・藤原の宮都」が
世界文化遺産に登録

■世界文化遺産「飛鳥・藤原の宮都」特集



皇居東御苑への入口として使用されている「平川橋」とその先に位置する「平川門」

関西大学考古学の学統と誇り

——受け継がれる陵墓保全への思い

- 前宮内庁書陵部陵墓課 陵墓調査官・関西大学客員教授
徳田 誠志 さん —文学研究科1989年修了—
- 宮内庁書陵部陵墓課 陵墓調査室
田中 詢弥 さん —文学研究科2022年修了—

2026年7月、「飛鳥・藤原の宮都」の世界文化遺産登録が決定した。日本国家の成り立ちを示すこの飛鳥・藤原の地で、戦後70年以上にわたり発掘調査と研究を牽引してきたのが関西大学文学部考古学研究室。その学統を受け継ぎ、宮内庁書陵部陵墓課で30年以上にわたって陵墓の保全や調査に携わった徳田誠志さんと、その職を引き継いだ田中詢弥さんに、陵墓保全業務の最前線から、世界遺産登録決定への思い、世代を超えて受け継がれる「土規七則」の精神まで、考古学研究室にまつわる物語を聞いた。

●陵墓保全を支えるプロフェッショナル

——宮内庁陵墓課での仕事について教えてください。

徳田 「陵墓」という言葉自体へのなじみが薄いかもしれませんが、皇室のお墓のことで、歴代の天皇や皇后のお墓を「陵」、それ以外の皇族の方々のお墓を「墓」と呼びます。宮内庁が管理する陵墓は全国に460カ所899あり、天皇陵としては初代の神武天皇から昭和天皇までその形は多種多様。陵墓調査室の研究職員は、これらの陵墓を適切に保全し、未来へ伝えていくための学術的な調査・研究を担っています。私はここで32年間、主に古墳時代の大形前方後円墳の調査や研究に携わってきました。



▲宮内庁時代、最後に訪れた仁徳天皇陵にて（2022年）。右は2021年調査時

田中 私は2022年に入庁し、5年目です。専門分野は古墳時代ではなく、中世・近世の城郭ですが、明治天皇伏見桃山陵が豊臣秀吉の伏見城跡に造られているように、城郭と深いかわりを持つお墓もあります。この分野（城郭）を専門とする職員は陵墓調査室では私一人ですので、新しいアプローチで陵墓の保全業務に貢献できるのではと感じています。

——陵墓を守るうえで、難しさを感じることはありますか？

田中 近年は自然災害が多いことが気に掛かっています。能登半島地震の際、私は石川県加賀市の出身ですので特に心配になり、江戸時代の皇族のお墓がある野田山・加賀藩主前田家墓所を訪れましたが、周囲の前田家のお墓や多くの灯籠が倒壊しているのを目の当たりにしました。文化財としての価値もある陵墓をどのように災害等から守り、その本義を継承していくのか、難しいですがやりがいのある課題です。

徳田 陵墓は全国1都2府30県に分布しており、皇室の活動が全国に及んでいることが分かります。陵墓についてはさまざまな意見がありますが、地元の方々が親しみを持ち、大切にされている姿を見るたびに、この長い歴史を守り伝えていくべきだと強く感じます。

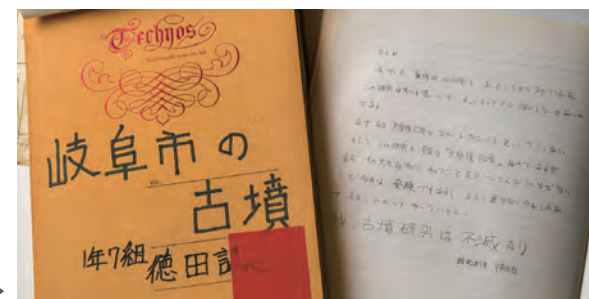
●50年前の「自由研究」と「一度きりの実験」

——考古学に興味を持ち、関西大学を選んだ原点をお聞かせください。

徳田 中学1年生の時、先生が「岐阜市内にも古墳がある」とおっしゃったのが始まりでした。それから夏休みの自由研究で市内の古墳を巡り、写真を撮って図面を描きました。今日持参した50年前のノートには「我、古墳研究は不滅なり」と決意表明まで書い

LEADERS NOW!

徳田さんが中学1年生の時に夏休みにまとめた研究ノート。最終ページには「我、古墳研究は不滅なり」とあり、その情熱は50年を経た現在も消えない▶



ています(笑)。その後、網干善教先生がマルコ山古墳の調査をされているニュースを見て、「日本一大きな古墳がある大阪に行き、関大の網干先生のもとで考古学を学ぼう」と決意しました。

田中 私は金沢城の復元ブームなどに触れる環境で育ちました。小学4年生の時、歴史漫画を読んで歴史用語を「自学ノート」にまとめたのが原点です。その後、纏向遺跡の特集番組を見たり、『魏志倭人伝』を読み解いて邪馬台国論争をノートに整理したりするほど没頭しました。そして大阪に出て歴史を学びたいと思い、関大に進学。米田文孝先生の授業で博物館を見学し、気付けば考古学研究室に定着していました。



▲出雲大社への研究室旅行

——考古学研究室において、特に印象的だった経験を教えてください。

徳田 大学3年次生の時、壁画が見つかる前のキトラ古墳の測量調査に参加したこと、インド国にあるサヘート遺跡(祇園精舎)の日印共同学術調査に参加したことですね。海外では、出土品の年代が直感的には分からないため、「深く掘るほど古いものが出土する」という考古学の原則「層位学」や「型式学」を徹底的に学びました。調査を主導した網干先生は、風呂にも入れない過酷な環境でも「風呂に入らなくて死んだやつはいない」と一喝し、自らも肋骨にヒビが入る怪我をされながらも調査を続行され、学者魂を背中から教えてくださいました。



▲日印共同学術調査でのサヘート遺跡(祇園精舎)にて(1987～1989年)

■世界文化遺産「飛鳥・藤原の宮都」特集



田中 詢弥——たなか じゅんや
■1997年石川県生まれ。2020年関西大学文学部総合人文学科日本史・文化遺産学専修卒業、2022年文学研究科総合人文学専攻日本史学専修修了。考古学研究室では米田文孝教授に師事。2022年宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査室入庁。現在、関西大学文学研究科総合人文学専攻史学専修修士課程後期課程に在籍中。

関大考古学研究室では一流の研究者のもとで、歴史の教科書に載っているような遺跡や遺物を調査研究するという、他では味わえない経験ができます。ぜひ真実を自らつかみ取る面白さに挑戦してください。

田中 大学院生時代に参加した中尾山古墳の再発掘調査では、米田先生の「発掘調査は一度しかできない実験」という教を胸に、遺跡を壊さずに八角墳の確証を得るためのトレンチ(調査区)設定を真剣に議論しました。仮説通りに八角墳の角石が出土した瞬間の感動や、1300年の時を経ても石櫛内部できれいに磨き上げられた壁面が輝いていた光景は、今でも脳裏に焼き付いています。



▲大学院生時代に参加した中尾山古墳の再発掘調査(左が田中さん)
◀宮内庁による仁徳天皇百舌鳥耳原中陵の第3墳整備工事予定区域の事前調査で報道関係者に説明する田中さん(写真提供:産経新聞社)

●「土規七則」の精神と、奇跡のバトンパス

——関大考古学研究室の「強み」は何でしょうか？

徳田 全国各地に文化財に携わる卒業生がいること、研究室の創設者である末永雅雄先生が残された「土規七則」でしょうか。これは吉田松陰の教えを学生向けにアレンジしたもので、「生活は質素、研究費は放胆に使い」「体調に留意」「相互扶助」など研究活動をする上での七つの心得です。

田中 私も自然とその言葉を目にして育ちました。体調を崩して入院した際、先生方も病室まで見舞いに来てくださって、この土規七則の精神が、研究室の温かいチームワークとして生きていることを肌で感じました。発掘調査は一人では絶対にできませんが、互いを補い合う土壌が関大にはあります。



(左上) 考古学研究室にて、米田文孝教授から卒業証書の授与
(左下) 卒業式後、考古学研究室・米田教授と同級生たちと(左が田中さん)
(右) 戦国末期から江戸初期の惣構(城・城下町を囲う土塁と堀)について執筆した卒業論文で、文学部卒業論文優秀賞を受賞

——田中さんが宮内庁へ入庁した背景には、不思議な縁があったそうですね。

田中 大学院1年次生の時に大谷翔平選手のような「目標管理シート」を作り、実は「宮内庁書陵部陵墓課に入庁する」と書いていました。陵墓課の研究職員は退職者が出ない限り募集がない狭き門ですが、チャンスが来た時のために必死に論文を書いていました。するとわずか1年後、徳田先生の退官に伴う募集があり、米田先生からも「すぐ受験なさい!」と言われ、運命的なタイミングで内定をいただくことができました。

徳田 優秀な応募者が多数いた中で、実力で内定を勝ち取ってくれて本当にうれしかったですね。

●飛鳥・藤原への思いと考古学の魅力

——「飛鳥・藤原の宮都」が世界文化遺産に登録されました。

徳田 私の考古学人生は明日香村の遺跡に育ててもらいましたので、本当に感無量です。宮内庁時代にも天武・持統天皇陵の構成資産入りについて、地元自治体や関係省庁と議論を重ねてきました。

しかし、世界遺産への登録はゴールではなくスタート。関大は「飛鳥史学文学講座」の開催や、明日香村との連携協定を通して学術成果を還元し続けていますが、今後は考古学だけではなく、さまざまな研究分野から世界遺産にかかわり、支えていくことが求められていると思います。

田中 保存されずに消えゆく遺跡も多くある中で、自分が携わった中尾山古墳が世界遺産となり、当時取り組んでいた一つ一つの調査に意味があり、歴史的価値を証明するワンピースだったのだと実感しています。「観光活用」と「厳格な保全」は対立するように思われますが、目指す目的は同じ「未来へ伝えること」です。

——考古学という学問の最大の魅力は何でしょうか？

徳田 私は考古学(アルケオロジー)をもじって、「考古学は、歩け学(あるけがく)」だと言っています。自分の足で遺跡を歩き、目で見て、手で触れることができる。遺跡・遺物は決して嘘をつきません。千数百年前の歴史の真実を解き明かすことができる、その瞬間に立ち会える興奮こそが醍醐味です。

田中 研究分野の中世・近世では文献が多く残っていますが、当時の支配者の思惑によって書き換えられた記述が多々あります。発掘調査で出土した事実と文献が異なる場合に、「なぜあえて記述を変えたのか?」多角的な視点で推理していくプロセスが一番



皇居内に建つ宮内庁書陵部の庁舎を背景に

自分の足で遺跡を歩き、目で見て、手で触れることができる。遺跡・遺物は決して嘘をつきません。千数百年前の歴史の真実を解き明かすことができる、その瞬間に立ち会える興奮こそが醍醐味です。



徳田 誠志——とくだ まさし
■1962年岐阜県生まれ。1984年関西大学文学部史学・地理学科卒業、1986年文学研究科日本史学専攻博士課程前期課程修了、1989年同博士課程後期課程単位取得後退学。考古学研究室では網干善教授に師事。2005年関西大学博士(文学)。1990年宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査室入庁後、2022年定年退官まで仁徳天皇陵など古墳時代の陵墓における保全・調査業務に従事。関西大学客員教授、国士館大学客員教授。

面白い部分ですね。考古学は、測量やミュオン透視等の先端技術も活用する総合科学ともいえます。

——今後の目標と後輩たちへのメッセージをお願いします。

徳田 近いうちに集大成として著作を刊行することが目標です。32年間の大形前方後円墳の調査知見をまとめ、次世代へバトンをつなぐことが使命だと思っています。歴史や考古学を学びたいなら、関大を選べばまず間違いありません。考古学に限らず、どんな分野にも挑戦できる大学ですので、自分が選んだ道を突き進んでほしいと思います。

田中 私は現在、博士課程後期課程にも在籍しており、まずは博士号の取得を目標としています。学術的な知見を蓄え、確かな専門性と信頼性を備えた研究者として、遺跡や陵墓の保全と継承に貢献したいと考えています。若い皆さんには、まず一歩踏み出して、その先に広がる世界を見てもらいたいですね。関大考古学研究室では一流の研究者のもとで、歴史の教科書に載っているような遺跡や遺物を調査研究するという、他では味わえない経験ができます。ぜひ真実を自らつかみ取る面白さに挑戦してください。

故郷・能登で育んだ 揺るがない心

——日本一に導いた左腕の原点

●人間健康学部 4年次生
米沢 友翔 さん (体育会野球部)

第75回全日本大学野球選手権記念大会を制し、1972年以来54年ぶり3度目の日本一に輝いた体育会野球部。その中心に立ったのが、最高殊勲選手賞(MVP)を獲得したエース左腕・米沢友翔さん。能登半島地震による故郷の被災、怪我、チームの低迷期——逆境を乗り越え、ドラフト候補として注目を集めるまでに成長。その歩みを振り返ってもらった。

●石川の自然で育った野球少年

石川県珠洲市の自然に囲まれた環境で育った米沢さんは、野球をしていた父の影響で、小学2年から野球を始めた。「本当に野球一筋でした。ゲームも好きではなくて、家の前でずっとキャッチボールをしていましたね。プロ野球選手になれたらいいなと思っていました」。珠洲市立緑ヶ丘中学校では軟式野球部に入り、金沢高等学校では投手と野手を兼任。投手として先発を任された2年春はベスト4、夏に県大会準優勝を経験したものの、全国大会出場には届かなかった。高校時代はコロナ禍や肩の怪我也有り、思うような投球ができない時期もあった。

関西大学に入学したきっかけは「高校の投手コーチが元阪神タイガースの選手で、山口高志さん(関大野球部アドバイザースタッフ)とつながりがあり、そのご縁で関大の練習に参加させてもらいました」。広いキャンパスや野球グラウンドの環境、先輩たちの気さくな雰囲気、進学を決めたという。学業面では、福祉やスポーツ分野を実践的に学ぶ人間健康学部で、身体の各部位の仕組みや食事・健康に関する知識を学び、「身体をどう使えばパフォーマンスが向上するのかを理論的に理解することは、野球にも役立ちましたね。短距離のスピードも向上しました」。



▲小学生野球チーム時代の米沢さん(前列中央)



LEADERS NOW!



●能登半島地震と野球への葛藤

1年次の正月、能登半島地震で故郷が被災する。「ちょうど帰省していて、祖母も含め家族全員が実家にいた時でした。午後4時10分、震度6強、強烈な揺れがありました。壊れた窓枠から外へ出ると、周りの家は潰れ、景色が一変していました。実家は山側で亀裂程度で済みましたが、海側の祖母の家は津波の被害を受けました」。

しばらくは野球に気持ちが向かず、身が入らない日々だった。「地元が大変な状況だったので、大阪には帰りたくない、珠洲に残ると両親に言いましたが、『あなたは大阪に戻って野球をなさい』と背中を押されました。その後も震災の報道は見たくなくて……あまり見ないようにしていました」。大阪へ戻ってからも、簡単には気持ちを切り替えられなかったが、チームメイトや先輩たちの支えで少しずつ向き合えるようになったという。

●投げられない苦しみ、自分との戦いを経て

その頃からチームはリーグ4季連続Bクラスの低迷期に。そして米沢さん自身も怪我に苦しんだ。2年次の春に左肩に違和感を覚え、「3年次の春の登板で痛めた時は、もう投げられないかもしれないと思いました」。手術はしない選択をして、リハビリに取り組んだ。

「トレーナーの方を信じてひたすらリハビリを続けました。先輩の金丸夢斗さん(中日ドラゴンズ)も大学時代に腰を痛めていたので、連絡してトレーニングを教えてもらうなど、少しでも前に進める方法を探しました。最終的には自分自身との戦いでしたね」。

チームは勝てず、自分も投げられない。3年次の夏頃からは周りが就職活動を始め、「母からは『石川に帰ってきてもいいよ』とも言われました。野球を続けるか本気で悩み、追い込まれていた時期でした」。



▲2026年侍ジャパン大学日本代表として初代世界王者に輝く



▲2026年第75回全日本大学野球選手権記念大会で優勝



米沢さんのキャップ、クラブと全日本選手権の優勝メダル▶



▲エース左腕の米沢友翔さん

●全国制覇へ。日本一への転機

怪我が完治し、完全復活できたのは3年次の秋だった。「痛みが完全になくなり、投げられることが本当にうれしかったです」。4年次の春のリーグ戦で先発復帰し、関西学院大学戦では、1安打無四球完封の準完全試合を達成。勢いに乗ったチームは5季ぶりのリーグ制覇を果たし、全日本大学野球選手権でも日本一に駆け上がった。

低迷していたチームが、全国制覇へと変貌を遂げた背景には意識改革があった。「主将を中心に、勝ちにこだわる意識がチームに浸透したと思います。練習内容は変わっていませんが、取り組む姿勢が変わりました」。選手同士で意見を言い合う関係ができたことも大きかったという。「特に4年次生を中心に、自発的に気づいたことを言語化して共有する雰囲気ができていましたね」。



▲堺キャンパスの体験学習エリアにあるアドベンチャー施設



▲堺キャンパスの正門前で

米沢 友翔——よねざわ ゆうと
■2004年石川県珠洲市生まれ。金沢高等学校卒業。2026年侍ジャパン大学日本代表。左投左打。憧れの選手はシカゴ・カブスの今永昇太選手。趣味は平成のドラマや映画鑑賞。好きな食べ物はハンバーガー。

●関大野球部で得た財産

試合では、山口さんからの「マウンドでは胸を張りなさい」という言葉を意識している。感情に振り回されず、まわりを気にしすぎないことは自分の強みだという。「マイペースすぎるとよく言われますが(笑)、投手向きの性格とも言われます」。

ドラフトへの注目が集まるが、米沢さんにとって最も身近な目標が金丸さんだった。「ドラフトで名前が呼ばれた時の金丸さんは、本当にかっこよかったです。『追いつきます』と金丸さんと約束しました。自分も指名していただけるなら、どの球団でも頑張りたいです」。

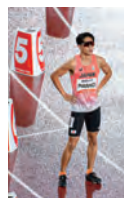
最後に大学生活について「小田洋一監督、山口さん、金丸さんをはじめ、たくさんの人に出会い、支えていただきました。震災や怪我など苦しい経験もありましたが、この4年間で人としても強くなったと思います」と振り返る。「珠洲でのびのびと育ったことが、どんな状況でも動じない自分の強さの原点です。故郷のためにも、これからも頑張りたいです」。

多くの壁を乗り越えた左腕は今、プロへの道を視界にしっかりと捉えている。

LEADERS NOW!

20th Asian Games Aichi-Nagoya 2026

世界へ駆ける ラストスパート



日本一、アジア大会入賞、その先へ
800mランナーの飽くなき挑戦

●社会学部 3年次生
萬野 七樹 さん (体育会陸上部)

「優勝を目指していました」。第95回日本学生陸上競技対校選手権大会(日本インカレ)男子800m決勝に臨んだ萬野七樹さんには、その言葉を裏付ける確かな理由があった。怪我を乗り越えて磨き上げたラストスパートという強み、切磋琢磨する仲間たち、そして積み重ねてきた努力。支えてくれた人々への感謝を胸に、日本の頂点からアジアへ、そして世界へと挑戦の舞台を広げている。トラック2周のドラマに魅せられたアスリートの現在地と、その先の目標に迫った。



萬野 七樹 — まんの ななき

■2005年大阪府生まれ。大阪府立大塚高等学校卒業。2026年に開催された、第110回日本陸上競技選手権大会、第95回日本学生陸上競技対校選手権大会で、ともに優勝。第20回アジア競技大会陸上男子800mで7位入賞。リフレッシュ方法は銭湯やサウナで汗を流すこと。好きな食べ物はラーメン。



▲アジア大会 陸上男子800mで7位入賞

●勝つことにこだわったレースで日本一に

2026年6月。愛知県名古屋市のパロマ瑞穂スタジアムには、全国から陸上競技の精鋭たちが集結していた。第110回日本陸上競技選手権大会。13日は、800m決勝の日だった。優勝に加え、所定のタイムをクリアすれば、同年9月中旬から開催される第20回アジア競技大会への参加資格が得られる重要な一戦。萬野さんは、5月のレースですでにアジア大会の派遣設定記録を突破しており、日本選手権では優勝を目標に臨んだ。

戦い方は決まっていた。「序盤は先頭集団の後方に付け、ラストでスパートをかける」。前日の予選も同じ戦術で臨み、2着。「予選より早めに仕掛けようと思い、距離感を保っていました」。

号砲が鳴った。予選と同じく、1周目は4番手につける。レースが終盤に差しかかるにつれ、萬野さんを含む4人が後続を引き離していく。会場の熱気が高まる中、ラスト150m付近で萬野さんが動いた。3番手に浮上すると、力強く腕を振り、直線で一気に加速。残りわずか。ゴール直前で2人をかわし、そのまま先頭でフィニッシュした。記録は1分46秒45。レース直後は「優勝の実感はありませんでした」と振り返ったが、目標通りの結果だった。

●怪我を経て磨いた新たな武器

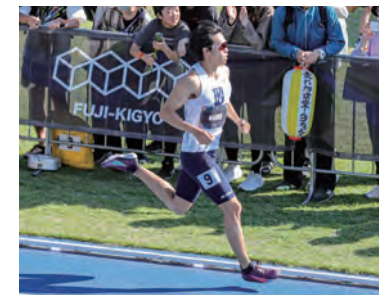
今シーズン、萬野さんは主要大会で結果を重ねている。4月の日本学生陸上競技個人選手権大会で優勝し、5月の第103回関西学生陸上競技対校選手権大会(関西インカレ)でも頂点に立った。同月の日本グランプリシリーズMDC (Middle Distance Circuit)では、自己ベストにして日本学生歴代2位となる、1分45秒31を記録した。「磨いてきたラストスパートが、自分の武器になったことが大きいです」。

新たな武器に目覚めたのは、1年ほど前のこと。怪我がきっかけだった。「夏にくるぶし付近を傷めてしまい、2、3カ月の間、満足のいく練習や走りができなくなりました」。回復したと思って練習を再開すると、再び痛みが走る。監督やチームメイトに励

The 110th JAAF Athletics Championships



▲日本選手権 男子800mで初優勝した萬野さん。この優勝でアジア大会内定を手にした(写真提供:早稲田スポーツ新聞会)



▲2026年MDCで関西学生新記録をマーク



▲2026年関西インカレで萬野さんが大会新記録で優勝

まされながらも、焦りは募った。一方で、自分の走りと向き合う時間にもなった。「勝てる選手は、ラスト150m付近から伸びてくる。自分もその力を身につけたい」。痛みも落ち着いてきた冬頃から、ラストスパートの強化に重点を置いた練習を重ねた。「最後にギアを上げるために、300mや400mの本数を増やし、レース終盤まで余力を残すため、持久力をアップするトレーニングに取り組みました」。その成果はすぐに表れた。

●ライバルから刺激を受けて成長

自身の性格を「効率的」と話す萬野さん。本格的に陸上を始めたのは中学1年生の時。しかし、当初は800mには興味がなかったという。「100mが好きでした。でも、ライバルも多い種目ですし、彼らに勝てるほどの力は僕にはないと思っていました」。自らの適性を見極めながら、短距離から距離を伸ばした。その後、1500mや3000mにも挑戦したが、「持ち味のスピードを生かせない」と感じていた中学3年生のとき、800mに出合った。

関西大学陸上競技部への入部も、シンプルな理由に基づいた選択だった。「実家から通える強豪校への進学を考えていました。高校時代から知っていた、高梨有仁さんが所属していたことも大きかったですね」。入部後は高梨さんをはじめとする先輩たちから刺激を受ける毎日。「皆さん速くて強い。練習についていだけで、タイムが伸びていく実感がありました」。実際、部内の競争は激しい。今年の関西インカレでは、萬野さんを含む関大勢3人が800mの決勝に進んだ。「多くのライバルの存在が、関大陸上部の魅力。普段はめちゃくちゃ仲が良いですけどね」。

●世界の舞台を見据え、更なる進化を

萬野さんは、2026年9月5日から7日に行われた日本インカレでも優勝を果たした。2番手から最終コーナーで一気に抜き去るスパートでの勝利だった。主要大会で好成績を残す萬野さんだが、

自身をストイックに律しているわけではないという。「食べたいものを食べますし、練習でも息を抜くところは抜く。心身のバランスを大切にしています」。ただ、主要大会の2週間前からは、好物のラーメンや甘いものを控えるなど体調管理に努める。自分の状態を見極め、整える姿勢が強さを支えている。

日本選手権と同じ名古屋で開催されるアジア大会は、萬野さんにとって初の国際大会。それでも気負いはなかった。「楽しみたいです。普段どおりを心がけて、まずは決勝進出を目指します」。その言葉通り、アジア大会では決勝へ進出し、世界レベルの強豪選手たちと競い合い7位入賞を果たした。「来年はユニバーシアード、更には北京で世界陸上も開催されます。派遣設定記録は1分43秒台と厳しいですが、結果を残せば出場が叶う可能性もある。頑張ります」。萬野さんは更に先の世界の舞台を見据える。

アジア大会でもう一つの目的があった。「800mの魅力を、たくさんの人に知ってもらいたいです」。萬野さんは「これほどドラマチックな競技はない」と語る。「トラック2周のなかに、スピード勝負もあれば駆け引きもあり、さまざまなドラマが渦巻いています」。800mに懸ける情熱を胸に、萬野さんの挑戦は関西大学からアジアへ、そして世界へと続いていく。



研究最前線

ジェンダーに関する学生意識調査 • Survey on Kansai University Students' Attitudes towards Gender Issues



約40年の継続調査から捉える 関大生のジェンダー意識

—時代とともに変わる学生の「今」を見つめる

Exploring Kansai University Students' Gender Attitudes through Nearly 40 Years of Continuous Surveys

Tracing Changes in Student Attitudes over Time

●人権問題研究室 ジェンダー研究班

酒井 千絵 教授 (社会学部)

多賀 太 教授 (文学部)

- Gender Studies Research Group, Institute of Human Rights Studies
- Professor *Chie Sakai* (Faculty of Sociology)
- Professor *Futoshi Taga* (Faculty of Letters)



●酒井 千絵 教授



●多賀 太 教授

1987年から、関西大学の学生を対象にジェンダーをめぐる意識調査を続けてきた関西大学人権問題研究室ジェンダー研究班。今秋、9年ぶりとなる第6回の学生意識調査を実施する。約40年の間に、学生を取り巻く社会やジェンダーに関する課題はどう変わり、調査は何を捉えてきたのか。人権問題研究室の歩みとともに、調査を継続する意義や、今回の調査で見つめる学生の「今」について、酒井千絵教授(社会学部)と多賀 太教授(文学部)に話を聞いた。

Since 1987, the Gender Studies Research Group at Kansai University's Institute of Human Rights Studies has been surveying the university's students about their attitudes toward gender. This fall, the group will conduct its sixth student survey, the first in nine years. Over nearly 40 years, how have the society students live in and the gender issues they face changed, and what have the surveys revealed? We spoke with Professor Chie Sakai of the Faculty of Sociology and Professor Futoshi Taga of the Faculty of Letters about the history of the Institute of Human Rights Studies, the value of continuing the surveys, and the realities of student life that this latest survey will explore.

私立大学では初となる研究機関の創設

人権にかかわる国内外の差別を研究・調査し、学内外における基本的人権の確立と、そのための教育・研究の向上を目的に活動する人権問題研究室。前身の部落問題研究室は1974年に開設された。人権や差別に関する問題を扱う研究機関として全国の大学で2番目、私立大学では初めてだった。

1985年6月、人権問題研究室に改組し、部落問題、人種・民族問題、障害者問題(現・障害)、女性問題(現・ジェンダー)の4研究班制となった。女性問題研究班は2008年度にジェンダー研究班へ名称を変更している。幹事を務める酒井教授は、その活動について「各班では年2回の研究学習会を行っており、人権問題研究室全体では年間8回になります。学生が参加したり、オンラインで視聴したりできる機会もあります。研究成果は年2回発行する紀要で発表するほか、人権問題研究室全体で、学外にも開かれた公開講座を年4回開催しています」と話す。こうした研究活動の一つとして、女性問題研究班の時代から続いてきたのが、関大生のジェンダー意識を捉える調査だ。

Establishing the First Institute of Its Kind at a Private University

The Institute of Human Rights Studies researches and investigates discrimination in Japan and abroad. Its aim is to secure fundamental human rights within and beyond the university and to advance education and research in support of that goal. Its predecessor, the Institute of Buraku Studies, was established in 1974. It was the second university institute in Japan to address human rights and discrimination, and the first at a private university.

In June 1985, it was reorganized as the Institute of Human Rights Studies, with four research groups covering buraku issues, race and ethnicity, issues facing handicapped people (now people with disabilities), and women's issues (now gender). The Women's Issues Research Group was renamed the Gender Studies Research Group in the 2008 academic year. Professor Sakai, who serves as secretary, describes the institute's activities: "Each group holds two research seminars a year, making eight across the institute. There are also opportunities for students to attend or watch online. In addition to publishing our findings in a twice-yearly bulletin, the institute holds four public lectures a year, which are also open to people outside the university." One of these research activities is the survey of Kansai University students' attitudes toward gender, which dates back to the Women's Issues Research Group.



時代背景に沿って続けてきた意識調査の変遷

ジェンダー研究班(前身の女性問題研究班を含む)は、1987年、1993年、2002年、2008年、2017年に、関西大学の学生を対象とする意識調査を実施してきた。今秋は9年ぶり、第6回の調査となる。初回の1987年当時、関西大学学部生に占める女性の割合は16.8%だった。「男女雇用機会均等法が1986年に施行され、女性の社会参加を促進する制度改革へと一歩進んだ頃です。しかしその反面、性差別的な思考・行動様式などが日常生活で今以上に強かった時代。その中で、学生の性役割意識の実態や、それが日常生活に与える影響を探ることを主目的として調査を開始しようです」と多賀教授は話す。

その後1990年代以降は、育児休業法成立、男女共同参画社会基本法、DV防止法の成立など、男女平等をめぐる制度整備が進んだ。社会状況が変化中、過去の調査結果と比較しながら学生たちの意識の変化を捉えられることに、調査を継続する意義がある。

How the surveys have evolved with the times

The Gender Studies Research Group and its predecessor, the Women's Issues Research Group, conducted surveys of Kansai University students' attitudes in 1987, 1993, 2002, 2008, and 2017. This fall's survey will be the sixth, and the first in nine years. At the time of the first survey in 1987, women made up 16.8% of Kansai University's undergraduates. "The Act on Equal Opportunity and Treatment between Men and Women in Employment had come into force in 1986, marking a step toward institutional reforms to encourage women's participation in society. Yet sexist ways of thinking and behaving were more deeply entrenched in everyday life than they are today. It appears that the survey was launched against this backdrop primarily to explore students' attitudes toward gender roles and how those attitudes affected their daily lives," says Professor Taga.

From the 1990s onward, the legal framework for gender equality developed further with the enactment of the Act on Childcare Leave, Caregiver Leave, and Other Measures for the Welfare of Workers Caring for Children or Other Family Members; the Basic Act for Gender Equal Society; and the Act on the Prevention of Spousal Violence and the Protection of Victims. As society changes, continuing the surveys makes it possible to track shifts in students' attitudes by comparing the findings with earlier results.

■研究最前線

●関西大学学生のジェンダー意識調査(第1回から第5回までの調査概要)
Kansai University Student Survey on Gender Attitudes: Overview of Surveys 1-5

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	
実施年	1987年	1993年	2002年	2008年	2017年	
調査方法	郵送調査	郵送調査	郵送調査	郵送調査	郵送調査	Web調査
母集団	全1・3年次生	全1・3年次生	全1・3年次生	全1・3年次生	全1・3年次生	
標本数	女性 937 男性 1,232	女性 1,000 男性 1,000	女性 1,000 男性 1,000	女性 1,000 男性 1,000	女性 1,000 男性 1,000	女性 1,000 男性 1,000
回収数(率)	691(31.9%)	709(35.5%)	581(29.1%)	814(40.7%)	613(30.7%)	284(14.2%)
					897(22.4%)	
主な質問内容	パーソナリティ項目、性役割指向性、女性観・男性観、結婚観、職業観、学校教育と性役割観、啓発項目	大学生生活、将来の職業や人生設計、女性観・男性観・結婚観、教育と男女平等、女性学教育の課題、女性論、男女の望ましい関係	大学生生活、将来の職業や人生設計、女性観・男性観・結婚観、教育と男女平等、男女の望ましい関係	大学生生活と相談相手、生活技能、将来の職業や人生設計、女性観・男性観・結婚観、大学教育とジェンダー、男女の望ましい関係	生活技能、性別役割分業観、結婚観、自分とパートナーのライフコース希望、LGBTに対する意識、戦争観、デートDVの実態、大学に求める取り組み	

調査は、大学教育にもつながってきた。そのひとつに挙げられるのが、ジェンダー関連科目の開講だ。2000年代になると前身の女性問題研究班研究員が2年ごとの期間限定科目として女性問題関連科目を開講するようになり、2008年度には共通教養科目「現代社会とジェンダー」「ジェンダーで読み解く戦争」(2020年度まで)が常設開講に、続けて複数学部でもジェンダー関連の専門科目が開講された。学生の実態に即した意識を把握する調査を通じて、関連科目常設の必要性を示すことができたことが後押しの一つになったといえる。更に2022年度からは、共通教養科目「現代社会とセクシュアリティ」が新設されたことも、大きな成果となった。

調査内容も時代に合わせて変化してきた。2008年の第4回から研究テーマの名称を「大学教育と女性」から「大学教育とジェンダー」に変更。2017年の第5回では、従来の性別役割分業観や結婚観に加え、男性の抱える問題や性の多様性、デートDVに関する設問などを新たに設けた。継続して比較する項目を残しながら、その時々の課題を設問に取り入れることで、関大生の「今」を捉えてきた。

■9年ぶりの調査で、学生の「今」を捉える

9年ぶりとなる今回の調査では、設問も社会や学生を取り巻く状況に合わせて見直した。「社会ではあからさまな女性差別も減少し、本学でも学生の女性が占める割合も増えました。その反面、セクシュアリティやジェンダーアイデンティティをめぐる周囲との差異を感じ、大学で学びづらい、相談しづらい……そういった新たな問題があるだろうと考えます。そうした問題の具体的な内容も丁寧に拾い上げられる設問にしました」と酒井教授。

これまで調査結果は、女性問題・ジェンダー関連科目の開講や、学生のニーズに沿った授業内容を検討するための基礎資料として活用されてきた。今後は学生の実際の声を教職員とも共有し、ジェンダーをめぐる課題への理解を深め、学生への支援や教育のあり方を考えるきっかけにもしたいという。

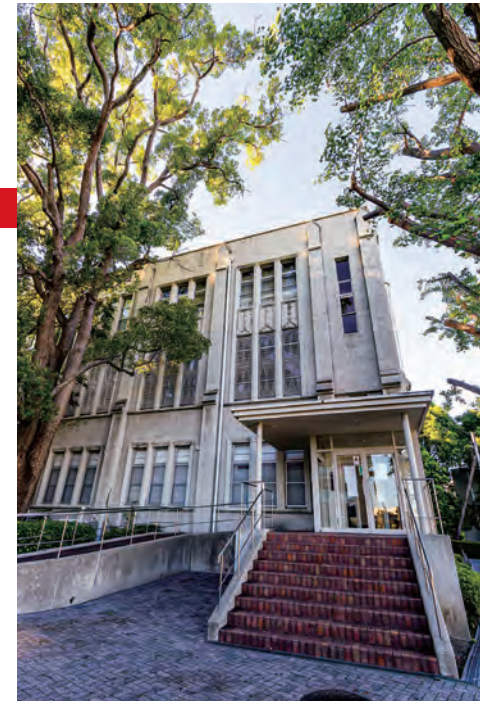
回答方法も変わる。2017年の前回調査は郵送とWEBを併用したが、今回は大学のポータルサイト「インフォメーションシステム」を活用し、全1・3年次生を対象に回答を受け付ける。

「この意識調査では『関大生の意識を知る』ということが最大の目的です。もちろん全国調査は母集団が大きく回収率も高いですが、関大生が全国平均と同じとは限りません。我々がいつも接している、授業で相対している学生たちの現状を知ることが重要だと考えます。学生たちが現状抱えている問題に耳を傾ける。そして大学はどう対応できるのか、何をすべきかということを考える、良い機会になるはずです」と多賀教授。



▲ジェンダー、人権問題の理解を深めるガイドブック
Guidebooks on gender and human rights issues

「ジェンダーの問題は、マイノリティだという自覚がある人だけの問題ではありません。身の回りで友達や家族が悩んでいた、困難を抱えている場合もあるでしょう。あなたの仲間が発言を躊躇したり、ここには居場所がないと思いながら、同じキャンパスを共有しているかもしれません。誰もがこの問題の当事者なのです。自分も問題に関わっていく一人として、ぜひ積極的に回答してほしいですね」(酒井教授)



▲人権問題研究室 外観
Exterior of the Institute of Human Rights Studies

The surveys have also helped shape education at the university. One example is the introduction of courses on gender. In the 2000s, members of what was then the Women's Issues Research Group began offering a series of courses on women's issues for limited two-year periods. In the 2008 academic year, "Contemporary Society and Gender" and "War and Gender" became regular general education courses, with the latter running until the 2020 academic year. Several faculties subsequently introduced specialized courses on gender. By documenting students' attitudes in the context of their lives, the surveys helped make the case for offering these courses regularly and appear to have contributed to their introduction. Another major achievement was the introduction of the general education course "Contemporary Society and Sexuality" in the 2022 academic year.

The content of the surveys has also changed over the years. With the fourth survey in 2008, the research theme changed from "University Education and Women" to "University Education and Gender." The fifth survey, in 2017, added questions on issues facing men, sexual diversity, and dating violence to the existing questions on the division of roles between men and women, views on marriage, and other topics. By retaining questions for comparison over time while adding others that address the issues of the day, the surveys have captured the realities of life for Kansai University students at each stage.

■Understanding students today: The first survey in nine years

For this survey, the first in nine years, the questions have been revised to reflect changes in society and students' circumstances. "Overt discrimination against women has declined in society, and the proportion of women among our students has also increased. At the same time, we believe new problems may have emerged. Students who feel different from those around them in terms of sexuality or gender identity may find it difficult to study at university or seek advice. We've designed the questions to explore the specifics of these problems with care," says Professor Sakai.

The survey findings have provided a basis for introducing courses on women's issues and gender, and for considering how course content can meet students' needs. The group also hopes to share students' own voices with faculty and staff to deepen their understanding of gender issues and encourage discussion about how the university supports and educates its students.

Students will also have a new way to respond. Whereas the previous survey in 2017 accepted both postal and online responses, this survey will use the university's Information System portal and invite



▲ジェンダー研究班の教員による著書
Books authored by members of the Gender Studies Research Group

responses from all first- and third-year students.

"The main purpose of this survey is to understand the attitudes of Kansai University students. Of course, national surveys cover larger populations and achieve higher response rates, but our students' views do not necessarily match the national average. We believe it is important to understand the circumstances of the students we interact with every day and teach in our classrooms. We need to listen to the problems students face today. The survey should provide a valuable opportunity to consider how the university can respond and what it should do," explains Professor Taga.

"Gender issues do not concern only those who see themselves as belonging to a minority. Friends or family members around you may be struggling or facing difficulties. Your peers may be sharing the same campus while hesitating to speak up or feeling that they have no place here. These issues concern every one of us. I hope students will take an active part in the survey, recognizing that they too have a role in addressing these issues," says Professor Sakai.



◎大阪・関西万博のレガシーを未来へ——

学生会館「誠之館群」の建替計画を推進



関西大学は、課外活動拠点として長年親しまれてきた千里山キャンパスの学生会館「誠之館群」の建替計画を推進する。新施設は鉄骨造・地上11階建て、延床面積約2万2,000㎡。大阪・関西万博のシンボル「大屋根リング」の木材を再利用したエントランス空間を整備する。万博のレガシーである理念や記憶、環境負荷低減(SDGs)を学生の学びや交流へと継承し、2027年4月の着工、2029年3月の完成を目指す。

また、8月29・30日には、解体工事を控えた建物を特別に一般公開する「誠之館OPENDAY」を開催。現役学生や卒業生、地域・関係者ら多くの思い出を持つ人々が訪れ、誠之館との最後の別れを惜しんだ。



▲2号館の共有スペースに設けた「寄せ書き(メッセージ)ウォール」にはさまざまな思いが書き込まれた

学生会館「誠之館群」建替計画の概要

●課外活動の新拠点として学生会館を再整備

誠之館は文化会・学術研究会・体育会などの活動拠点。誠之館2号館～8号館のうち、2・3・5号館は建設から半世紀以上が経過し、老朽化や活動スペース不足が課題となっていた。このたびの建て替えにより、学生の自主性や社会性を育む教育環境を拡充する。

●多様な出会いと価値創造を生み出す「キャンパス・コア」

新施設のコンセプトは「アクティブ・グリーンヒル・キャンパス」。象徴的なエントランスをはじめ、全学生・教職員が利用できるトレーニングジム、共通講義空間、音楽・スポーツなどの活動機能、部室等を備えた交流拠点を目指す。

●大阪・関西万博の理念と記憶を未来へ継承

大阪・関西万博のシンボル「大屋根リング」の一部をエントランスに再利用。リング解体後も、万博の「多様でありながら、ひとつ」の理念や記憶を次世代へ継承するとともに、資源循環や環境負荷低減に寄与するサステナブルエコノミーの実践を目指す。また、国産材の活用や地域活性化にも貢献し、SDGs推進を象徴する施設とする。



アクティブ・グリーンヒル・キャンパスの実現に向けて

01 「キャンパス・コア・コンプレックス」の形成

多様な社会的価値の創出

- ・様々な活動風景が混ざり合う、賑わいと活動の中心を創出する
- ・オープンな課外活動機能を再編し、キャンパスの中央に据える

02 多様な「知」が集積する「共通講義機能」

さまざまな「学びの交感」

- ・多学部が利用できる講義スペースで、多様な学びに触れる場とする
- ・各学舎等の建て替え時に、仮移転先(タネ地)としても活用する

03 キャンパスの回遊性を高める「森のパサージュ」

文化的創造力の涵養

- ・悠久の庭から法文エリアをつなぎ、丘陵の緑・万博木材、活動と学びの風景に歩きながら触れるパサージュを設ける
- ・回遊性向上と賑わい創出で、キャンパス全体の価値を高める

04 「歴史的な丘陵と緑地」と「活動の風景」が表出する施設

キャンパス景観の継承

- ・地形に沿い、緑と学生活動が立体的に展開する風景を創出する
- ・設立前からの丘陵と豊かな緑地、育まれてきた活動風景を生かす

05 「レガシーの継承」と「環境に寄り添う建築」

SDGs推進の表現

- ・万博の大屋根リングの一部再現により、「多様でありながらひとつ」を継承する
- ・木材活用や建材アップサイクルによるSDGs推進を表現する
- ・ユニバーサルデザインや省エネ配慮など、SDGs達成に向けた整備を徹底する



◎「Discover KANSAI! 関関同立で拓く、関西の学び×文化×暮らし」

4大学の学長が語る「関西で学ぶ価値と、その先のキャリア」



(左から) 関西大学 高橋智幸学長、関西学院大学 森康俊学長、同志社大学 小原克博学長、立命館大学 仲谷善雄学長

8月26日、関西大学、関西学院大学、同志社大学、立命館大学の4大学の学長が一堂に会し、関西で学ぶ魅力について語り合うイベント「Discover KANSAI! 関関同立で拓く、関西の学び×文化×暮らし」が名古屋市内で開催された。

高等教育における東京一極集中が背景にある中、文教地区としての関西の魅力を広く発信することを目的に企画された本イベント。第1部の学長座談会では、リクルート進学総研所長の小林浩氏をモデレーターに迎え、「関西で学ぶ価値と、その先のキャリア」をテーマに議論が交わされた。

登壇した4大学の学長は、自大学の特色や関西で学ぶ意義を紹介。「ここちよい距離感」「ひとり一人が違って当たり前という文化」「やってみよう精神」の3点を挙げ、学びやすさや暮らしやすさを説明した。また、他大学の学長からも「大阪・京都・神戸という個性豊かな3都市の近接性」「人を楽しませようとする文化」「大学と地域の盛んな連携」「豊かな感性を育む歴史や文化」など、多角的な魅力が紹介され、活発な意見交換が行われた。

続く第2部では、本学卒業生アンバサダーのお笑いコンビ・南海キャンディーズの山里亮太さん(2001年文学部卒業)によるトークショーを実施。山里さんは、自身が千葉県から関西へ進学した体験談を交えて学生生活を語った。更に、4大学の東海圏出身学生による座談会では司会も務め、アルバイトや課外活動、地域交流を通じて感じた関西の魅力を紹介し、会場を大いに盛り上げた。

当日は、愛知県や近隣地域の高校生、保護者ら約200人が来場。熱心に耳を傾け、終了後の個別座談会でも積極的に質問する参加者の姿が見られた。



▲山里亮太さん

◎全日本大学野球選手権記念大会で54年ぶりの3回目V!

野球部の全国制覇を記念し、凱旋パレードを開催



2026年6月、神宮野球場等で行われた第75回全日本大学野球選手権記念大会において、体育会野球部が54年ぶり3回目の優勝を果たした。これを記念し、7月9日に千里山キャンパス周辺で優勝パレードおよび優勝報告会が開催され、駆け付けた学生や教職員、地域住民など約3,000人が歴史的快挙を祝った。

パレードは関大前商店街からスタート。選手たちは応援団による学歌や応援歌の演奏に合わせて行進し、沿道に集まった観衆からの温かい拍手や「優勝おめでとう!」の声援に笑顔で応えた。

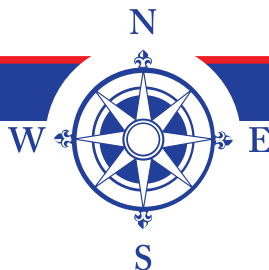
総合図書館前ではフラワーシャワーも行われたほか、吹田市のイメージキャラクター「すいたん」も参加。地域の方々と喜びを分かち合う、華やかなひと時となった。

また、悠久の庭で開催された優勝報告会には、200人を超える野球部員が参加。多くの観客が見守る中、学長および理事長による祝辞や花束贈呈が行われ、野球部を代表して森内大奈主将(総合情報学部4年次生)が優勝の報告と感謝の言葉を力強く述べた。



KANDAI

■関大ニュース



NEWS

ビジネスデータサイエンス学部と クロス・マーケティンググループが連携協定を締結

7月、ビジネスデータサイエンス学部と株式会社クロス・マーケティンググループは、「データ活用教育および次世代人材の育成に関する連携協定」を締結した。

これに基づき、本学部は2027年秋学期よりマーケティングリサーチの知見を生かしたPBL (Project Based Learning、問題解決型学習) 演習科目を導入。同社のリサーチ実務担当者が講師として参画し、国内最大級・1,600万人以上のパネル基盤を用いた実践形式を通じて、「データに基づく意思決定力」と「生活者理解の視点」を兼ね備えた人材の育成を目指す。

イノベーション創生センター 10周年記念シンポジウムを開催



トークセッションの様子

9月26日、イノベーション創生センター(KUCIC:Kansai University Center for Innovation & Creativity)の創設10周年を記念したシンポジウム「10年の挑戦を、次の革新へ〜Beyond Innovation〜」を開催した。

2016年の開設以来、本センターは産学官連携・大学発スタートアップ支援の先進拠点として研究成果を社会実装へとつなぐハブの役割を担ってきた。この10年で、大学発スタートアップを創出する環境は、個々の大学の取組みから、大学や金融機関、企業、自治体、国の支援機関などが連携する「エコシステム」へと進化。当日は、その歩みを振り返りつつ、次の10年に向けた新産業創出における大学の価値や役割について、活発な議論が交わされた。



参加者の交流会

池上彰客員教授講演会を開催



池上氏は、アメリカの政治動向や中東情勢などが日本経済や生活に直結していると述べ、アメリカ社会の格差や雇用、薬物問題、宗教的価値観がもたらす分断や対立の背景を解説。更に、歴史の知識を手掛かりに多角的な視点で情報を比較する重要性を語り、「大学では、学んだ知識を結び付けて分析し、運用する力を養ってほしい」とメッセージを送った。

6月25日、本学客員教授でフリージャーナリストの池上彰氏による特別講演「国際情報を理解するために」を千里山キャンパスで開催し、多くの学生や職員が聴講した。

体育会サッカー部の高橋哲也さんが川崎フロンターレに、 真田蓮司さんが北海道コンサドーレ札幌に入団内定

2026/27シーズンから体育会サッカー部の高橋哲也さん(文学部4年次生)が川崎フロンターレに、真田蓮司さん(法学部4年次生)が北海道コンサドーレ札幌へ加入することが内定した。



▲高橋さん

(写真提供:関大スポーツ編集局)



▲真田さん

高橋さんのポジションはセンターバック。守備の要として、驚異的なスピードを生かしたカバーリングと圧倒的な空中戦の強さが持ち味。

真田さんのポジションはミッドフィルダー。豊富な運動量と優れたアジリティを武器に攻守へ広く顔を出し、複数のポジションを高いレベルでこなす。

体育会陸上競技部のアブラハム光オシナチさんが、 U20世界陸上競技選手権大会で4位入賞



日本時間8月10日、米国・オレゴンで開催された「第21回U20世界陸上競技選手権大会」最終日、男子4×100mリレー決勝に日本代表のアブラハム光オシナチさん(人間健康学部2年次生)が第2走として出場。日本はシーズンベストの39秒41をマークし、3位のジャマイカとわずか0.4秒差の4位入賞を果たした。

日本時間8月10日、米国・オレゴンで開催された「第21回U20世界陸上競技選手権大会」最終日、男子4×100mリレー決勝に日本代表のアブラハム光オシナチさん(人間健康学部2年次生)が第2走として出場。日本はシーズンベストの39秒41をマークし、3位のジャマイカとわずか0.4秒差の4位入賞を果たした。

体育会テニス部の高山揺さん・中島莉良さんペア、 全日本学生室内テニス選手権女子ダブルスで初優勝！

8月22日、東京・有明テニスの森公園で行われた2026全日本学生室内テニス選手権の女子ダブルス決勝で、高山揺さん(商学部3年次生)・中島莉良さん(人間健康学部2年次生)ペアが亜細亜大学と対戦した。苦しい序盤を乗り越え、後半では抜群の勝負強さとコンビネーションを発揮。フルセットの末に逆転勝利を収め、関西大学女子ダブルス勢として悲願の初優勝を果たし、全国制覇を達成した。



▲ダブルスで優勝した高山さん(右)と中島さん(左)
(写真提供:永富慎也)

KANSAI UNIVERSITY SOCIAL MEDIA

